

人間と動物との関係に関する研究

－総合学習の観点から－

学校教育専攻

総合学習開発コース

勝部 真基子

指導教官 近森憲助

1. はじめに

人間と動物は、かなり古い時代からかかわりを持ってきた。最初は食料として、その後農耕や輸送における使役動物としてのかかわりを持ち、今日ではそれらに加えて娯楽、安全確保及び介助等を通してかかわりを持っている。これらは、すべて人間と動物との実利的なかかわりである。しかし、人間とペットとしての動物とのかかわりはどのようなかかわりなのだろうか。本研究では、このような基本的な問題意識を持ちつつ、アラン・ベック及びアーロン・カッチャーが著した「Between Pets and People—The importance of animal companionship」（「ペットと人間との関係—仲間としての動物の重要性」）を参考としながら、本論文第Ⅰ章において、ペットと人間との関係、特に人間が生きていくことと動物とのかかわりについて考察を加えた。この考察を通して、人間と動物、特にペットとしての動物と人間との関係を捉える基本的な視座を確保することとした。第Ⅱ章においては、教育と動物をテーマとして、中川美穂子監修「学校飼育動物のすべて—子供とゆとりある飼育を楽しむために」を基に現在の学校飼育動物の現状と課題を整理し、動物をテーマとした、あるいは動物に関連したテーマを取り上げ実践された4件の事例について検討した。さらに第Ⅲ章では、第Ⅰ章及び第Ⅱ章における考察及び検討の結果を基に、学校教育における動物の利用、

特に総合学習における動物の利用について提案した。

2. 人間と動物のかかわりについて

(1) 人間とペットとの関係

アラン・ベック及びアーロン・カッチャーの二人が著した「Between Pets and People—The importance of animal companionship」（「ペットと人間との関係—仲間としての動物の重要性」）の1章から9章までにおいて、人間とペットとしての動物は様々な行動や行為によって繋がっており、その関係は固有のものであり、具体的には親密さを本質とする仲間意識（Companionship）である。この固有の関係をを通して人間の情緒の安定といった利益が創出され、それにより仲間意識が強化・促進されていくのである。そして、動物とかわることにより得られる情緒の安定という効果は、AAT（Animal Assisted Therapy：動物介在療法）やAAA（Animal Assisted Activities：動物介在活動）などにおいて精神的・情緒的障害に苦しむ人々の治療のために積極的に利用されている。さらに、動物を含めた植物、海、山、川など自然を、ただ単に「見る」という行為によっても様々な鎮静効果が得られるということも述べられている。人間と自然とのかかわりを基にして景観保全や環境教育を考えると、大変重要な指摘である。

(2) 人間と犬との関係

人間との繋がりが特に強く、代表的なペットである犬と人間との関係の根底には人間は狼を祖先とする犬を家畜化し、その後自分たちの好みに合うように改良していったという歴史が存在する。その結果犬は新たな特性として幼形的な性質を獲得した。この特性及び動物であるということから、人間とのかかわりを通して、犬は親密さ、満足感、喜び、必要とされている感覚が生まれ、無条件で無批判の受容や安心感、自己肯定感も感じることができると人間に提供することができる。さらに、その時々状況や必要性に応じて、人間は犬を仲間・子ども・理想の母親・兄弟として位置づけている。しかし、社会秩序感覚やコミュニケーション能力など、改良によって失われることなく犬が祖先の狼から受け継いだ特性も人間と犬が家族という社会的グループを形成することに寄与する。したがって、犬にとっては家族は群れであり、飼い主は群れのリーダーとして認識され、明確な階層性が存在する。しかし、何らかの原因により、この階層性に乱れが生じると、咬傷事故などの様々なトラブルが発生する。

犬によって起こされる問題には、「ペット・ロス」や「安楽死」あるいは「遺棄」などがある。社会的には、咬傷事故や排泄物による感染症など公衆衛生上の問題や騒音被害などが、特に都市部において問題となっている。犬は人間が必要に応じて作りだした存在であることから、人間は犬の充実した生を保証する責任を歴史的に負っている。トラブルの発生を防ぎつつ犬などの動物との関係性を豊かにすることは、人間及び犬両者にとって様々な利益を生むことは前述の通りである。これが、人間と動物とのかかわりを学習する最大の意義である。

3. 学校飼育動物の現状と課題及び動物を題材

にした授業実践例

(1) 学校飼育動物の現状と課題

中川美穂子監修の「学校飼育動物のすべて」を基に学校飼育動物の現状と課題について整理した結果、学校飼育動物は現在飼育舎飼育が殆どであり、学校、獣医師、行政との連携が十分に取れていないために様々な問題が起こっていることが明らかとなった。

(2) 動物を題材にした授業実践例

古典（徒然草）の学習を通して、アライグマなどの移入動物問題を考える授業では、珍しい動物を飼いたがる人間の意識がテーマとなっているように思われる。ニワトリを取り入れた小学校における総合学習の実践には、動物の体や行動などを観察することにより自然を見つめることを体験する活動としての意義が感じられる。また、犬を保護したことによって仲間意識を感じ、世話すること、思いやることなど犬との関係を通して学ぶ事例や鶏を実際に殺し食べるという授業を通して、人間と動物との実利的な関係の一つを直接体験する授業など、4件の実践事例について2. において述べた点をもとに若干の検討を加えた。

4. 総合学習への提言

人間と動物とのかかわりは多様性に富み、また複合的である。その意味で、このテーマは総合学習に最も適したものである。学習内容の構築に当たっては、何よりも自分自身が生きることとのつながりにおいて、子どもたちが動物とのかかわりから様々な利益を享受できると及びその利益を人間同士の関係作りに活かせるようにすることをねらいとするべきである。ここでは、このようなねらいについて、これまでの検討結果との関連を述べるとともに、学習プランの概略的な枠組みを提示した。